

獅子文六著『悦ちゃん』

(ちくま文庫)は何度読んでも楽しい小説だ。利発で天真爛漫な女の子、悦ちゃん、その父親の再婚をめぐる波瀾万丈にハラハラし、機微に触れるやりとりで微笑み、人生の真理を突かれて涙も誘われる。紫陽花、菊日和、薄霜、お濠端の柳の芽、と日本の四季の美しさが端々に表れるのも素晴らしい。

ただし、この小説で私が最も驚くのはその現代性だ。80年前に書かれたのに、その市民感覚はほとんど現在と距離がない。親戚の別荘に避暑に行くための水着を、悦ちゃんはパパと銀座のデパートへ買いに行く。悦ちゃんは銀座のI屋の文

## 読書術の遅れの半歩



川本 裕子

房具と銀ブラが前から好きだ。麻布と青山はお洒落な場所、サラリーマンは丸

### 獅子文六の描く東京

の内や新宿に満員電車で通勤する。職人の「名人気質」の凋落が嘆かれ、新聞には企業幹部の背任が載る。「罪」にはドアとルビがふられ、令嬢は、日比谷公会堂の音楽会へドレスと白いファーを着ていくとある。(シヤンパンでの乾杯が、「プロ

ージット!」なのは、当時の親独感情の表れだろう) 太平洋戦争という大きな悲劇に向かう陰鬱な時代という、学校で学ぶ歴史のイメージとは大違いで、舞台が東京なのを割り引いても、昭和11年(1936年)に書かれた作品とはとても信じられない。軍国主義な

### 現代的感觉 早くも根付く

どの戦前社会の暗く歪んだ側面は厳然たる事実だが、一方で本書が生き活きと描く、自由で明るい、都市的な市民感覚もまた、昭和初期の日本の現実の一端だったのだろう。歴史は多面的だと改めて感じる。

『1940年体制』(野

口悠紀雄著、東洋経済新報社)は、「それまでの日本の制度と異質のもの」が戦時に作られ、日本の経済体制として長く継続したと指摘して反響を呼んだ。『現代日本経済システムの源流』(岡崎哲二、奥野正寛編、日本経済新聞社)も、株主による経営陣のモニタリング

など、戦前の株主重視の経済システムを検証する。長期雇用、間接金融優位などの「日本型経済システム」は、あくまで特定の時代の産物にすぎないというわけだ。そうしたシステムは戦後にも大きな刻印を残すが、その転換が求められ

てから、30年以上経過している。一方で、「悦ちゃん」が描く、戦前に既にあった現代的な生活感覚は、経済システムの変転をよそに、しっかりと日本に根付いてきたのだろう。

現代生活感覚の歴史の力強さに驚く一方、夏目漱石の『私の個人主義』(講談社学術文庫)を讀むと、日本の市民社会の課題についても忘れてはいけない、と思う。思想の付和雷同や受け売りを諷め、他者の自由の尊重と、権力を持つ者の責任を説く。個人に高い道徳基準を求め、1914年の漱石の論説も限りなく現代的だ。

(エコノミスト)